

だといわれますので、今からさへと四百二十年土前のこ
とです。冬霜月二十五日、夏は七月二十五日を祭り日と
定め、お浜出日生出（神幸祭）・神踊・杖踊・狂言など、永代怠りなく
勧めらるようご立願申し上げたところ、五穀豐熟・疫難
退治・村穩めがにして繁昌昌と伝えられています。

また、天和元年の夏祭りには、晴天であるのに餘かに
大水が出来たりして、神威量り難く村民懼びおののいて、
お浜出・神踊・杖踊など、黒沢の村のある限り急りなく
相続けるとの誓願誓願を立てたといつ。

これらの伝承は神社の伝本古文書に残り、私共は祖先から伝承するこの民俗芸能を、いかまでも守り続けた

けれど、なうません。

研究

わがふるさと『元田謙』
（三）

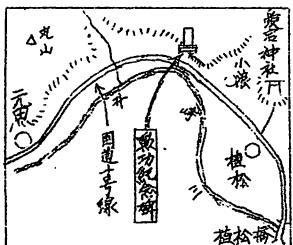
会員 市野瀬仁

軍籍者名簿

一八七七年（明治十年）の西南戦争によつて、國內戦は終止符をうつて以来、わが國が経験した対外戦争を年代順に列記してみると、ほぼ十年に一回の割合でおきてゐることがわかる。こうして世界の強国の仲間入りができない友のであるが、これも明治以来の日本の国是であつた「富國強兵」が実を結んだ結果ともいえる。

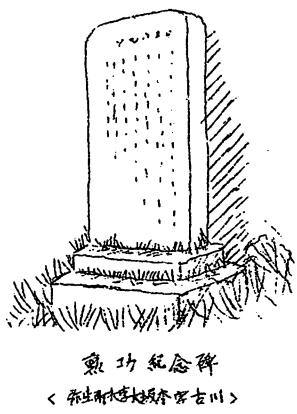
東アジアの、名も知られなかつた小さな島国日本が、長期間に長足の進歩をとげ、日清・日露の戦に連勝した

しかし、それから三十年後に勃発した今次大戦の結果
を、私達は正直に、冷厳に受けとめねばならない。省み
て十年に一回という戦争が数回続いて、どうして国民生
活に無理がいかないでおられようか。
今ここに、私達の部落から軍隊へ籍をおいた人々の、
年代と服飾地をみると、わが國の戦争史が歴然としてく
るのである。



古の表で四名ほどの日露戦争従軍者を出しているが、明治村大間地区の従軍者を、元田部落の衆のはずれ古川一義功記念碑」として建てているが、よくその時の事情を物語っている。

川野晋	大石正男	笠原義视	大石重光	市野瀬清	市野瀬重信	市野瀬长寄	市野瀬大介	市野瀬大介	市野瀬春雄	市野瀬顺一	市野瀬高治	市野瀬新十郎	市野瀬喜	川野正之	川野哲	川野左喜光	川野金也
南昌	滿州ハイラル	(佐世保) (鐵船様名)	佐世保	ミンダナオ島 (フィリピン)	エカロービー諸島	ミンダナオ島 (フィリピン)	福岡	ミンダナオ島 (フィリピン)	ミンダナオ島 (フィリピン)	鹿児島 (綱空隊)	公束	福岡	北支運城	都城	都城	都城	北支運城
				ミンダナオ島 (フィリピン)	エカロービー諸島	ミンダナオ島 (フィリピン)	福岡	ミンダナオ島 (フィリピン)	ミンダナオ島 (フィリピン)	鹿児島 (綱空隊)	公束	福岡	コムソモリベリヤ	玄賀闘	川野正之	川野金也	



勲功紀念碑
(御成町大間地区古川)

(編者注)

勲功碑の現場は、上掲地図に示す通り、植松バス停から元町方面へ向う途中の右側の切坂の外れ、國道から六、七メートル山が下にある。

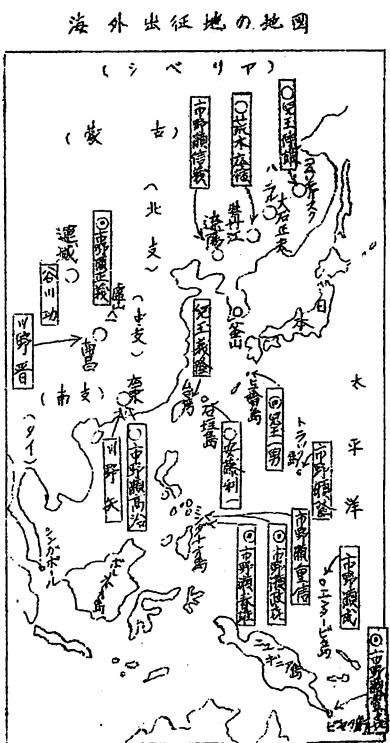
(勲功紀念碑 素面碑文)

此ニ刻スル五十二士ハ明治三十七八年ノ勲役ニ從軍シタリ。此後ヤ振古、大戰ニシテ我軍陸二海二連戦勝牒交戦、二十月終ニ敵ヲシテ樺太ノ半分ヲ納メ以テ和ニ講ス。國光仍テ輝キ東洋仍テ安シ。ニ士義勇奉行克フ其任ナ全フシ御党相共榮ナ分ツチ得而ニ其ニ失フニ遇キサリシハ蓋シ天祐也。茲ニ御党謀テ碑ヲ建テ以テ芳名ヲ不朽ニ伝ヘント然シテ余ニ記ナ諸フ余不文也ト雖モ義辞ス可ラズ則敍スルニ捷概ナ以テスト云爾。

神武天皇即位紀元二千五百六十八年

明治四十一年初秋

明治村長 犀六等河野 豊謹誌



(勲功記念碑 表面題名)

勲功紀念碑

(この五文字上部古横書)

陸軍大佐 正八位新六等 陸軍少將軍医 正八位新六等	松本義昌
陸軍少將軍醫 正八位新六等	所賀柳太郎
陸軍少將軍醫 正八位新六等	高司作治
陸軍少將軍醫 正八位新六等	河野庄太郎
陸軍少將軍醫 正八位新六等	高野辰五郎
陸軍少將軍醫 正八位新六等	高司伊佐
陸軍少將軍醫 正八位新六等	河野茂吉
陸軍少將軍醫 正八位新六等	河野岩太郎
陸軍少將軍醫 正八位新六等	荒川武市
陸軍少將軍醫 正八位新六等	古田太十郎
陸軍少將軍醫 正八位新六等	今山弥曾吉
陸軍少將軍醫 正八位新六等	河合守一郎
陸軍少將軍醫 正八位新六等	岩崎峯太郎
陸軍少將軍醫 正八位新六等	松本岩雄
海軍兵士 正八位新七等	狩生取磨
陸軍少將軍醫 正八位新六等	狩生弘市
陸軍少將軍醫 正八位新六等	高司幸太郎
陸軍少將軍醫 正八位新六等	高司安太郎
陸軍少將軍醫 正八位新六等	河野保太郎
陸軍少將軍醫 正八位新六等	長沢瑞五郎
陸軍少將軍醫 正八位新六等	高司榮作

陸軍大尉 正八位新八等 陸軍少將軍醫 正八位新六等	藤吉
陸軍大尉 正八位新八等 陸軍少將軍醫 正八位新六等	古田忠太郎
陸軍大尉 正八位新八等 陸軍少將軍醫 正八位新六等	高司彦太郎
陸軍大尉 正八位新八等 陸軍少將軍醫 正八位新六等	川源太郎
陸軍大尉 正八位新八等 陸軍少將軍醫 正八位新六等	武吉
陸軍大尉 正八位新八等 陸軍少將軍醫 正八位新六等	水原茂吉
陸軍大尉 正八位新八等 陸軍少將軍醫 正八位新六等	寺生武吉
陸軍大尉 正八位新八等 陸軍少將軍醫 正八位新六等	司彦太郎
陸軍大尉 正八位新八等 陸軍少將軍醫 正八位新六等	川源太郎

今次の日華事変から、太平洋戦争にかけて勇負された大災がどんなに大きいか、またその戦線がどれほど広大であるか、そして海外の第一線で戦つた兵士の犠牲が、いかほど多いことか。これを見て、五十戸以上満たないわが元田の村人同志が、顔を見あい手を取り合いながら、戦争というものの恐ろしさを、今更ながら身边に感ずることと思う。

私達は、せめて今次の戦争に従軍して、生き残った人々の記録をまとめ、統後の生活を想い出して、戦争が家庭をどれくらい破壊し、平和が何よりもかけがえのまい尊いものであるかということを、後世に知らせねばならないと思っている。

鏡後的生活

(一) 戰時中の回復のこと

鏡後の生活ではどの家でも、麦飯と甘藷が主食となつたほど、食生活は厳しかつた。この当時は麻木と大坂木が一緒に育つて明治村といつていしたが、毎月始めに村役場に各部落の族長を招集して、食糧増産につけて具体的な事項を指示した。とくに、米・甘藷・大豆・菜種の生産に増強を呼びかけていた。これがため、原野や川端の空地を開墾して、部落民全員で食糧の増産に取り組んだ。また稻作しても発虫害の防除下しても、また苗代田から本田に植付するまで、

すべて共同作業で一一致協力し、収穫の多くを供出し夫も
のであった。

この外、航空機燃料の生産のために、当時の農業会へ
現在の農場一ヶ經營で、小さな松根油製造工場が、元田
の前に設営された。今、市野頬新十郎さん家の前、安藤
信輝氏所有の島地にて、村内各部落から運びれた松の根株
が集積され、毎日三、四人の人達が交替で、それを割つて
木釜に投入して燃やし続けた。醤油のような色をした松
根油はドラム缶に入れて送り出された。

また金属の不足から、各家・各部落・各村にある銅鍛
類の供出が強制された。まず足間神社の青銅製神馬・寺
の釣鐘・古刀・仏具・筆筒の取手に至るまで対象となっ
た。なかでも風呂釜は三軒に一個の割合で残し、隣組で
共同風呂となつたのだから、日本の国情もせっぱつまつ
たものである。しかもこれら供出されたものが、すべて
兵器や燃料になるまでに至らず、ある所は集められたまま、
野ざらしになつていいたところが、今思ひ出しても、苦しかつただけに、まことにひとしおである。

(5) 婦人会の働き

銃後をさえた婦人会の力は大きかった。男手のする
仕事の外に、出征兵士にささげる干人針は、戦時でなければ
見られない風景であった。腹巻にする程度の中と長
さの白木綿に、道行く一人一人から針をもつて貰い、赤
糸の結びが千になつて仕上がる。心のこもつたお守りとも
て、ほとんどの出征兵士が身につけたものであった。
その外、出征兵士の送り出し、義死者無言の凱旋への
迎え、弔問、出征家庭への農作業の奉仕、防空訓練への
出動など、銃後活動の主役をつとめたものである。

爆弾投下

昭和二十年三月十八日深夜、ドスーンと地響きのする
大きな衝撃に目が覚め、家内の中寝床からとび起きた。程
遙い床木の岡田部落で爆弾が落ち、二名即死した時のこ
とであつた。家屋は木の燃みじんに吹へ飛び、深さ五呉
直径十呚あまりの大穴があつた。爆風のため蒲団の綿が
裏一面に散り、まるで雪が降つたように見えた。その上、
色とりどりの美しい布がれが樹々にかかり、人々を二重
に驚かした。それは町の吳服屋が反物を疊開していくもの
に、爆弾が当つただけだつたといふ。

これより外に、床木方面では大向・旧小学校下、芳石
ハ波山に爆弾が落ちたことがあり、そのつど婦人会員及
穴埋めにかり出されたものである。

二十年の春ともなると、夜となく昼となく、警戒警報
や空襲警報の鐘の音が聞こえてくる。やがてB-129とい
う戦闘爆撃機二十機ばかりの編隊が、ゴンゴン・ゴンゴ
ンとエンジンのごう音を、天地に響かせながらゆうゆう
と頭上はるか高くを飛んで行く。大体七、八千尺の高度で
あつたそつたが、私たちはこわごわと、ただじつと仰ぎ
見るだけであつた。

二十年の六月、茶摘みの頃であった。またB-129が来

左かなと思う間もなく、民間方面の上空から、物すごい爆裂音が聞こえてきた。下から打ち上げた高射砲の音か爆弾の音か、お互い顔を見合せた。

やがて中、谷崎から神野に入りこむ山の中腹に、B-1

29が墜落されたというあさが伝わった。

それから四、五時間すぎを午後三時頃、目からし札アメリカ兵一人と、何人かの死体を乗せて一台のトラックが、植松の方に下った。アメリカ兵の死体は宇摩木と植松に仮埋葬したが、生き残った一人の兵士は機械女態度で、なかなか口を割らなかつたということであつた。
「あれわれは遠からず戦争で勝つんだ」という、自信力ほどを見せたものであつたのだろうか。

沖縄の学童集団疎開

空襲はないあるかも知れなかつたが、学校は休校しまがつた。大間小学校では、主に部落のお宮の森に学童を集め、教師を一人ずつ配置して、勉強をつけることにした。元田では玄済の火伏さん(火伏堂)にかくれ場所を見つけ、腰掛けを学校から運び、青空教室を開いた。こうして授業をうけた学童たちの中には、昭和十九年未以来沖縄から集団疎開して来た学童も、何人か交つていた。

大間小学校は東吉集団疎開組は、鹿児島県・熊本県、宮崎県であふれてきた人々で、県南の方から木浦・小野市・川原木・直見・切畑・上野・大間・麻木の各小学校に配置され去るものであつた。学童は四年生から高等科二年まであり、四十八名の一集団に引率教師は第一名、女性一名が決められていた。この集団疎開は、文部省の命令で実施されたものである。

いくつかの船團に分かれ、普通一泊二日で可能なところを十日かかるべく、やへと鹿児島港に入港した。先鋒船團の船が米潜水艦に沈められたことがあつたから、十分慎重に航行したためであつた。

これら疎開して来た学童は、希望者で男つ女つ夫夫め、あまり貧困な人達ではなかつたという。

大間小学校区では、前田という男の教師の引率のもとに、お寺(西音寺)に宿泊した。また別に元田区は、潮平といい名字の一家族が、児玉輝喜さん宅の空家に住みつき、日傭いに出て生計を立て、時には部落の共同作業に参加したりして、所の人達となじんでいた。

沖縄の子供達には、平良・王城・金城・島袋・宮城など独特な名字があつたり、油濃いものを好んだり、習慣がかなり違つていた。また言葉のアクセントが異つたり、それにちよつと小柄であつて委縮していくよう見えたのも、異境の地区きて、人知れぬつらい思いをしていたのであらうか。

八月十五日正午、日本が敗れ、無条件降伏したので、玉音放送があつた。あわてて全く静寂であつた。時間は止まつているようだと言え思えだ。
やがて、滂沱と流れる太い涙を、どうしても止めることができなかつた。

沖縄の子供達どんどんすお別れをしたか憶えていまいか、彼等疎開集団は長崎県諫早の海軍基地に集結し、二十二年十一月は故郷沖縄へ出帆したといふことである。

以上集団疎開の大要は、当時引率して来られた河島弘宣氏(現上蒲原中学校長)から承つたことを加えてあることを書き、そえておくこととする。

(おわり)